



第28回

倉敷木材

歴史は大樹の年輪の如く

元岡山放送株式会社 常勤監査役 入野 和生

1905年（明治38年）、日本は世界第2位と言われていた海軍力を持つ帝政ロシアのバルチック艦隊を撃滅し、日露戦争に勝利した。国中が戦勝ムードに湧いた。そして経済は紡績や鉄鋼などの明治新政府の殖産興業による産業だけでなく銀行、電気、都市ガスなど近代国家の経済機能が地方でも急成長し、一般市民生活が活気に満ちてきた。

一方では軍備拡張路線と共に日韓併合、中国大陸覇権、やがて太平洋戦争へと進む日本の不幸な歴史のターニングポイントになる戦争だった。

その日露戦争から2年後の年、倉敷市内で兄弟2人が製材を中心にした1軒の材木店を創業した。店の屋号は^{おおくぼ}大久保材木店、現在の倉敷木材株式会社（以後株式会社省略）で、商品の材木は丸太で^{いかにだ}県北から高梁川を筏で下り搬送された。製材された材木の価格は市場より少し高かったが、それでも材質の良さは当時の大工の棟梁達の間で噂として拡がり、建築関係者が多く買い求めに店を訪れた。

“良い品物と情報を提供すれば、お客は自ずと集まって来る。”兄弟2人はこの経営の基本を崩さなかった。

◆倉敷木材の社是

《無声呼人（むせい こじん）》

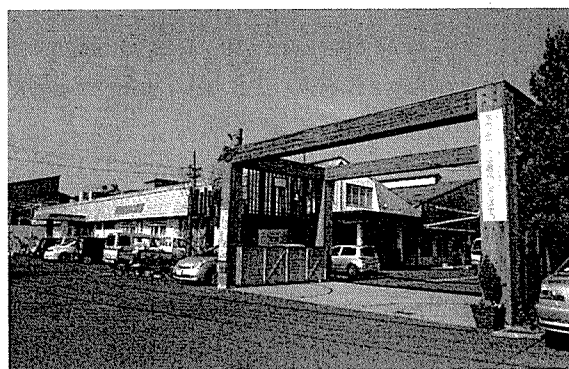
『会社は働く人が心を込めて仕事をし、有用なメッセージを発信し続ければ、結果として社会やお客様から信頼を寄せていただける。』という意味で、創業者大久保源次郎の遺訓として掲げられている。

創業から3代目の大久保憲作社長は『高い人格の人が多くの人に慕われるように、良い社風は黙っていても人を呼ぶ。』と社員の平

素の行ないの大切さを強調する。

◆会社概要と社長プロフィール

～材木商から住宅建設まで～



倉敷木材本社

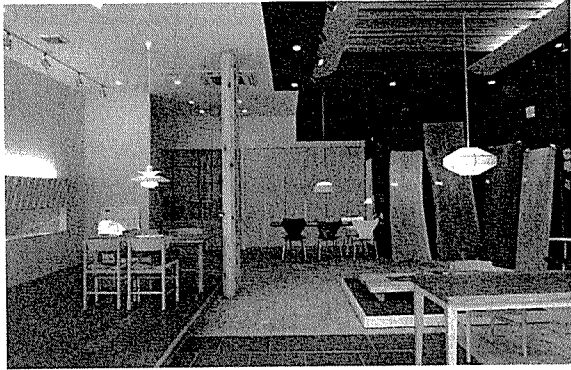
本社は倉敷市中島。創業の地・倉敷市寿町から1968年（昭和43年）移転した。従業員は約70名。売上高は約27億3千万円（平成23年7月期）。

売り上げの中心は建築資材の販売で、売上高の62%余りを占める。創業当時の国産材オンリーから、現在は輸入木材や各種メーカーの建材・設備機器なども扱っている。

現在売上げのシェア37.5%を占め少しずつ増えているのが住宅建設事業。始めて40年になり会社を支える柱のひとつになっている。

現在の営業体制は「暮らしのお手伝いシステム」として^{ロクラモク}建築センター^{暮らしらぼ}設備センター^{外装・サッシ}センター^{加工}センター^{木材営業}の各組織がリンクしてシステム化されている。

このうち“暮らしらぼ”は木製家具の製作、巨大な一枚板の展示、木製のおもちゃの展示・販売をしている。木の家で生活してきた日本



暮らしらば (岡山店)

の文化をシンプルに感じさせ、心安らぐ空間となっている。2000年(平成12年)倉敷本社内に倉敷店を、2008年(平成20年)岡山市北区間屋町に岡山店をそれぞれオープンしている。

～社長は良質な情報発信を目指す～

大久保憲作社長は1947年(昭和22年)生まれ。1970年早稲田大学理工学部を卒業後藤木工務店に入社、倉敷支店で約4年勤めた。退社後に父親の経営する倉敷木材に入社、1986年(昭和61年)社長に就任した。



大久保憲作社長

また1996年(平成8年)には『エフエムくらしき』を設立・開局し社長に就任。

家族は現在妻と二人暮らし。別居だが長男夫婦がいる。趣味はアマチュア無線で世界の人達と無線で交信するのを楽しみにしている。またヴァンテージラジオ、テレビ、真空管通信機器の蒐集もさりげなく自慢。

倉敷青年会議所理事長、倉敷ロータリークラブ会長、日本コミュニティ放送協会副会長などを幅広く歴任。現在は倉敷商工会議所副会頭、岡山経済同友会・地域交流委員会委員長他公職もいくつか兼ね、財界を中心に活動範囲が広い。特に地域づくりは倉敷青年会議所理事長時代から想いが強く、当時では珍しいタウンミーティングを1983年(昭和58年)始めた。パネリストは市民団体、行政、青年

会議所など市民各層の代表が参加したイベントで、街づくりの起爆剤としての大きな役目を担った。

同時に『エフエムくらしき』は倉敷市を放送エリアに全国53番目のコミュニティFMとして自ら立ち上げ、社長に就任している。現在は社員5名で年商は約8,000万円を推移している。近年は電源がOFFになっていても災害の緊急告知放送を大音量で受信できる緊急告知FMラジオ「こくっち」を開発し、話題を集めた。

12月に開局15周年を迎え、オープンした三井アウトレットパーク倉敷内にサテライトスタジオを常設した。赤字経営が多い全国の地域FM局の中でも『エフエムくらしき』は黒字経営の健全経営で知られる。

『エフエムくらしき』、タウンミーティングと共に“良質な情報発信こそが街づくりの基本になる”との考え。それは同時に倉敷木材の創業以来の基本的な経営姿勢でもある。

経営スローガンに『木と出会う。木と暮らす。時を経て質を知る』が掲げられている。

大久保憲作社長は「木は人間より長生きしている。300年も500年も生きた木はパワーを持っている。その木で出来たテーブルや机で、私達は食事をしたり、勉強したりしている。地域で採れた木を、地域の匠の力で製材・加工する。本物には力があるのです。」と語る。

そんな木の素晴らしさを知ってもらおうと、県下最大級の木のイベント「暮らしと木のフェア」や高梁川の源流を訪ねる旅なども開催している。より多くの人達に“木のあむ暮らしの素晴らしさ”が伝わるように提案し続けている。

◆歴史は4つのステージから

～第一ステージ・戦後まで国産材を製材～

倉敷木材は1907年(明治40年)倉敷市寿町で大久保源次郎と國太郎兄弟で屋号・大久保材木店として創業された。当時は三井グループ中興の祖・中上川彦次郎なかつみがわを社長とする民間の山陽鉄道が西へと伸び、岡山駅から

1 カ月遅れの 1891 年（明治 24 年）4 月倉敷駅が開業していた。

大久保材木店はその倉敷駅の北側の地・寿町に店舗を構えた。材木は中国山地産の丸太を高梁川から筏で川下りして搬送し、この丸太を当時“大八車”と呼ばれる荷駄車で店まで運び込んで製材していた。



創業者・大久保源次郎



大八車で運ぶ丸太

高梁川は古くから吹屋の吉岡銅山やベンガラを高瀬舟で運搬している河川輸送路で知られる。二人の兄弟はこの河川輸送路と新しく出来た鉄道という交通の要所に店舗を構えた。また店には 1906 年（明治 39 年）倉敷に開局したばかりの電話も引かれていた。ビジネスに対し進取の気性に富んで取組んでいたことが受け取られる。「クラモクは良材を製材する。」との噂はあつと言う間に建設関係者の話題になった。

国産の良材を中心に販売してきた時代は創業時代から戦後 1947 年（昭和 22 年）まで続いた。

～第二ステージ・新建材に参入へ～

1947 年（昭和 22 年）2 代目大久保忠輔社長が創業者から経営を引き継ぎ、店は倉敷木材へと称号変更された。

戦後の復興と高度成長時代、住宅産業は急成長していく。倉敷木材はこの住宅産業の成長の中で、これまでの国産材中心から新しい

建築資材のベニヤ・床材など新建材の販売を始めた。同時にキッチンや収納家具、トイレ、浴槽など住宅設備機器も取り扱い、売上げは急速に増えていった。業績が順調に伸びる中、1968 年（昭和 43 年）本社を創業の地から倉敷市中島に移転した。



2 代目大久保忠輔社長

～第三ステージ・住宅建設へ進出～

住宅ブーム真只中の 1972 年（昭和 47 年）住宅建築の分野に進出した。当初はコンクリートプレハブのウベハウス代理店として始まり、次のステップで木造注文住宅の設計・施工へとビジネスは進化していった。住宅建築が次第に会社の営業の柱になってくると共に、これまでの建築関係の顧客と競争することにもなった。しかしこれは企業が生き残る為に業態の変化や改革をする時に越えなければならぬハードルで、2 代目大久保忠輔社長の選択と決断は苦しみながらも進むしかなかった。

これに伴って CAD センターなど建築関連サービス部門の充実が進められ、住宅総合企業の形を整えていく。

住宅メーカーとしての信頼と実績は着実に伸びていった。現在までにリフォームを含め 2,200 件余りの実績を数えるまでに成長している。こうした第三ステージの半ば、1986 年（昭和 61 年）に 3 代目大久保憲作社長が就任した。

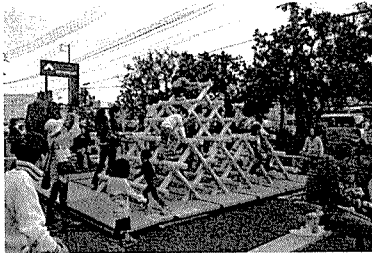
～第四ステージ・企業の社会的責任を実行～

1997 年（平成 9 年）創業 90 周年を迎えた。しかしこの年の夏ごろから住宅建築業界は大不況に陥った。

第四ステージは不況を乗り越える為、取扱商品だけでなく組織、戦略など全てに企業体質の改善を余儀なくされた。

社長就任から 10 年を迎えていた大久保憲作社長は経営理念「私達は仕事を通じて、豊

かなくらしを提案します」を実践する為に企業使命（ミッション）の再構築をした。そして地域社会との関わりを大切にしていける方向を策定し、翌年「木楽工房」をオープンした。「木楽工房」は半端材を活用しガーデニンググッズなどオリジナル商品の製造・販売をすることで木材の有効活用を目指した。



暮らしと木のフェア
(2011年11月)

また1998年（平成10年）「暮らしと木のフェア」のイベントを開催した。この催しは本社を会場にして親子で楽しめる木工教室や木のフリーマーケット、木のジャングルジムなど、木をテーマにしている。現在は毎年春と秋に各2日間の予定で開催され、親子連れがそれぞれのコーナーで木と触れ合いながら一日を楽しんでいる。

さらに2000年（平成12年）「暮らしらほ」をオープン。同じ年の夏休みには俳優の柳生博をアドバイザーに迎えて、自然の中で親子が心の基地づくりをするというコンセプトで「秘密基地づくり」を実施した。

そして創業100周年記念事業としてモデル企画住宅「MUKUの家」を発表、県産材を使いローコストのセミオーダー住宅としてヒット商品に結び付けている。

企業の社会的責任を明確にし、経営の方針が定まった時期でもあった。同時に地域と共に生きる倉敷木材の企業使命（ミッション）を発信し続けてきた。

◆NEXT100年へ

昨年11月20、21日（土、日）の2日間、恒例の「暮らしと木のフェア」が開かれた。会場の倉敷木材本社では木工教室や木のおもちゃプレゼント、それに石釜焼きパン工房や焼き芋コーナーなど多彩なコーナーが設けら

れ、2日間で約3,000人の親子が木の温もりに触れ合いながら一日を楽しんだ。

このイベントを始めた頃の小学生が、最近結婚し倉敷木材に注文住宅を発注した話があった。注文した男性は子供の頃に会場で楽しんだ木工教室の暖かい木の温もりが忘れられず「家を建てる時は倉敷木材に注文しようと考えていた。」ということだった。大久保憲作社長は「その若い父親もまた幼い子供を連れ木工教室に遊びに来てくれていた。」と素直に喜ぶ。

大久保憲作社長は倉敷木材の100年を振り返り「“くらしの木”という苗木が、時を経て根を張り、幹を太らせ、枝葉を広げたように思う」と語る。しかし小学生の子供が成長し、大人になってまた子供を連れて遊びに来た。そして木造住宅を注文した。苗木の成長はけっして会社だけでないような気がする。

今年は創業105年の年になる。

倉敷木材は外に向かって「クラモクはなんとなく良い会社」と呼ばれることを目指している。それは日頃の企業行動が敬意を持って評価され、同時に従業員も一人の市民として評価されることだと考えている。また社内に向けては「QOL（クオリティ・オブ・ライフ）にあふれた会社」を掲げ、従業員と家族が物質的にも精神的にも質の高い暮らしができる会社でありたいと願っている。そして従業員が良い家庭人であり、良い市民であれば『高い人格の人が多くの人に慕われるように、良い社風は黙っていても人を呼ぶ。』との社是にも結びつくことに他ならない。

倉敷木材という大樹がどのように進化していくか……それを物語る年輪は時が知ることになる。

NEXT100年に向けた新たなステージは始まっている。（敬称略）

参考文献

伸びゆく倉敷（倉敷郷土誌編集委員会）岡山木材史（金谷正之識著）あこのころの倉敷（フォーメンズ出版）岡山の電信電話（日本文教出版）鉄道の日本史（文献出版）